

「その若さで、自信に満ちた仕事、まことに感心である。師匠の教えがさぞ良かったのであろう。しかし、自信と慢心は表裏、論語に子曰く知者は惑わず仁者は憂えず勇者は恐れずとある。これは、知恵のある人は迷わない、仁のある人は不安にならない、勇気のある人は恐怖しないという教えじゃ。たえさん、今のお前は迷うておる。本当に知恵のあるものは迷わぬものじゃ。知恵も技も人が成すもの、人の心動かずして事は動かぬ、また、おのれも同じ。良いな」

芝山は素晴らしい残すと、たえの肩を二度ポンポンと叩き、その場を去って行った。

たえは難しい話に、褒められたのか、叱られた

たえの姿が浮かび上がっていた。

「たえさん、顔も体も泥々ではありませんか、風呂が空いたので一緒に入りましょう」

突然の誘いに断る理由もなく、二人は風呂に入った。

「たえさんは肌も日に焼け、しぐさも男なりじゃが、やはりおなごなのです。その上、器量よしじゃ、さ、背中を流してあげましょう」

「は、はい」
人に背中を洗ってもらうなど始めての経験である。顔はこわばり、背を丸めた姿をみかねたさわは、

「そのように、肩に力を入れたままでは、脇の下が洗えませんよ、もう少し力を抜きなされ、それに、たえさんの笑顔を見たことがあります。おなごの

のかわからず彦輔の顔を見る。

彦輔は消えかけたたいまつに木ぎれを差し込むと火の子と同時に周辺の明るさが戻った。

「たえさん、芝山先生はあなたのことを褒めたのですよ。その上で、あなたならこの問題を解決する知恵があるはず、迷わず自信を持って進みなさいとおっしゃったのです」

そういわれても、学問で池ができるのであれば苦労はしない。たえには全く納得できる言葉ではなかった。

夜も更け、男たちが寝静まった頃、彦輔の母さわは、片付けを終わらせた。ふと縁側に目をやると、そこには月の明かりだけに照らされて寂しく腰掛ける

笑顔は国の宝じゃ。ほれ笑うて」

湯気に煙る向こうに見えるたえは、顔を緩める努力をするが、うまく笑顔をつくれぬ。それどころか空しい気持ち溢れてきて涙すら浮かべている。

「私は男でも女でもありません。職人じゃ、職人にはそのようなことは必要ありません」

悔し紛れに心にもない言葉が、口から溢れ出る。それを聞いても、たえの背中をこするさわの手は止まらない。

「良い、よい、笑えないときには、阿弥陀如来というてみなされ」

「えっ？」
「そう、あみだによらい」
「あ、み、だ、によ、ら、い」
「ほうら、笑うた、たえさんが笑うた。思ったとおり

器量良しじや」

たえは、ほほを赤らめ恥ずかしさを隠すため両ひざに顔を埋めるのだった。

二日後、彦輔は高木村の世話役、兼松伊平の家を訪ねていた。池の拡張工事で水の下に沈むであろうお久米さん宅について話を訊くためだ。あわよくば村のために協力してもらえないかと説得するつもりである。

伊平は難色を示した。たえのいうとおり先祖伝来の田畑は、百姓の命であり、それが無くなるということは家が途絶えることなのだ。

ならば、代替地という方法があると提案した。現代では当たり前となった区画整理、地権者が同等

の土地と取り換えることで、土地収用せず一気に

都市の形を変えようとする方法だ。その斬新な提案にもかかわらず伊平は更に難色を示した。

百姓の土地への執着は非情に強い。代わりの土地など先祖に顔向けができぬと嘆くというのだ。悲観的な伊平の態度に業を煮やした彦輔は、自らお久米さんに直接交渉することにした。

お久米さんは、教えられたとおり一人息子と慎ましかな百姓を営んでいた。彦輔なりの説明と高木村、新田村の事情を熱く語った。しかし、悲観的な伊平がいったとおり、いやそれ以上の反発に成すすべも無く、途方に暮れて帰ろうと家を出た。その時、田の奥で、なにやら作業をする二人の姿が見えた。

一人はお久米さんの息子だろう。もう一人は、たえだつた。

走り寄ると、田に水を引く堰が朽ちているので治しているという。その修繕方法をお久米さんの息子が熱心に見ていた。

もし、水の底に沈むのなら無意味なことではないのか、心配顔の彦輔が問う。しかし、たえは黙って堰の修繕を続けた。真新しい木を組み、水路に取り付けると背伸びをして真っ青な空を見上げる。

「もう良いではないか。この田は良い田じや。この堰さえ、治れば秋には豊かな収穫が望めるぞ」

泥だらけになりながら、半日以上かかって堰を完成させた。たえは、なにもいわず、お久米さんの田

を後にする。彦輔も傷心を抱えたまま、たえの背中を追うように、あぜ道を歩いて帰った。

日が陰ってもまだまだ暑い帰り道、たえは彦輔に殿さまに会わせてほしいと願いだした。

会ってどうするのかと訊くと、自分の見立て違いのため池ができないことを話したいという。

そんなことになる、只では済まない。藩主が決めたいことを撤回させることなど、この時代、死罪にも値する。しかし、たえは譲らない。

「できぬものを、何度考えても同じじや。第一見立て違いをしたのは私だ。死罪にでもなれば、村の衆も許してくれるだろう」

腹はすでに決まっているようだ。

かえ ことば
返す言葉がなかった。本当にどうすることもできない自分が腹立たしかった。

いっぽう、新田村では菊造が村の若い衆と頭を抱えていた。彦輔とたえが来てから百姓の間で希望の光が見えていたのに、高木村の池が拡張できないと知ってから、二人に不信感が漂っている。藩主が年貢を免除してくれたこともあって、たえの意見を無視して新田村の中に独自のため池をつくる案が噴出していった。

菊造が相談できる相手といえ、たえと彦輔しか思い浮かばず、彦輔の家にやって来た。

二人ともまだ高木村から帰っておらず軒先で待つ

いる菊造に彦輔が語り始めた。

「新田村の人たちが落胆しているのは想像がつかず。私とたえさんが悪者になっていることでしよう。たえさんは池ができない理由を自分の見立て違いで技術的に困難だったといいましたが、本当の理由を説明しましょう」

「やめろ、彦輔」

うるたえるたえを制した。

池の下に沈むであろうお久米さんの家と田畑のことを説明した。そして、たえはそれを隠して池の拡張工事はできないと殿さまに直接申し立てするつもりなのだと話した。

菊造の顔色が一気に変わった。

ていると、そこへ暗い顔の二人が帰って来た。

矢継ぎ早に説明する菊造に、中で話しましょうといい家の中に導いた。たえもそれに続き、三人はたえの部屋に座った。

新田村にため池ができないのかと詰める菊造だが、たえは改まって頭を下げる。

「私の見立て違いで新田村と高木村の皆さんには本当に申し訳ないことをしました。申し開きするつもりはありません。でも、これだけは聞いて下さい。新田村に池を造ったとしても水は溜まりませぬ。流れ込む川は一本だけ、それも神五郎池の溢れ水だけじゃ。徒労に終わることは間違いない」

沈黙があった。下を向いて、話しくそうにして

「そんなことが、あったのかい。わしらは高木村のことなど何も知らずに自分たちのことばかり、お恥ずかしい限りじゃ。それに、たえさん、直接申し立てなご、お縄になつてもうたらあんなの一生も終わるじゃ。どうせ、事の起りは新田村の問題じゃ。これは新田村で収めねばならん。たえさんは心配せんでもええ、よいな」

たえは、下を向いて歯を食いしばって反論したい気持ちを一生懸命抑えているようだった。たえの自尊心はズタズタに崩壊していた。高屋の権左から教わった知識と独学で学んだ技術があれば何でもできると思いついていた。しかし、それは後藤芝山にいわれたとおり慢心だったのだ。

つぎ あさ 彦輔の朝、たえは慙愧の念を抱えたまま箸蔵村へ帰るため旅仕度を整えた。帰り道で新田村に立ち寄り、長老たちに謝るつもりらしい。

彦輔も新田村まで同行し、そこでたえと別れ、その足で後藤芝山のところへ経過を報告に行かねばならなかった。

たえは、彦輔の父と母に深く頭を下げると母のさわは持ちきれないほどの握り飯を持たせた。

父も母も、もう一生会うことはないであろう、この少女に幸多いことを願いながら、自分の娘のように別れを惜しんでいる。

その時だった。

二つの人影が家の玄関で立ち止まった。

たえが三人の前にお茶を置いて、部屋を出ようとした時、彦輔が声をかける。

(以上5月13日放送分)

「お久米さん……」

高木村のお久米さんと一人息子の利助である。

「彦輔さん、少し話を聞いてくれまいか」

今から出発するところだからという彦輔だったが、二人の懇願するような態度に、しかたなく「はい」と答え、二人を中へ入れた。

座敷に通されたお久米さんと利助さんは並んで彦輔の正面に座る。

たえは、席を外していたが、さわがお茶を持って行くというので、旅仕度を置いて、用意されたお茶を運んだ。

暗い顔で明らかに思いつめた表情の二人は下を向いている。